

ナイロビ・スラムの「学校」－ 場の自律性と地域との関係

井本佐保里

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻

大月研究室 博士後期課程

日本学術振興会特別研究員 DC2

研究対象とするケニアを始め、多くの途上国において子どもへの学校教育の普及は喫緊の課題として捉えられている。ケニアにおいても、国際社会によって定められたミレニアム開発目標等に後押しされ、2003年に初等教育無償化政策を打ち出した。これにより就学率は向上したが、一方で遊牧地やスラムは行政による学校整備が行き届かない'forgotten area'と言われる地域も存在しており、そこでの学校整備は、地域の手任せられている。

本研究では、行政によらずに学校が数多く設立されているケニアのスラムを調査対象とし、同地域でいかなるプロセスで学校が生成・発展しているのか。特に学校が地域の中でどのような「場」を形成し、地域と関係し合っているかについて明らかにすることで、スラムにおける学校という「場」の役割と地域との関係性について論じることを目的とする。

一般的に、ナイロビ市内においては市が直接公立学校を設立、建設している状況にある一方で、市内に多く点在するスラムの1つであるムクルスラム内に存在する公立学校は6校のみである。圧倒的な公立小学校不足の中、近年台頭しているのがNon formal学校である。Non formal学校とは、国が定める施設基準等に達しておらず、Ministry of Educationからの認可を受けていない学校を指す。一方、そのほとんどが「自助努力団体」としてMinistry of Gender, Sports and Social Developmentより認可を受けているが、認可基準はあくまで活動体制であり、施設整備状況や教育内容を測るものではない。あるNon formal学校の校長によれば、同スラム内に少なくとも70校のNon formal学校が存在していると言われている。スラムにおいて学校運営は1つのビジネスとして捉えられており、多くのNon formal学校の設立者もそのような個人である。

施設整備基準を持たないNon-formal学校はどのようにして学校空間を形成しているのだろうか。調査の結果、これら学校の空間構成は周辺環境に大きく影響を受けながら決定されていることが明らかになった。まず、周辺が込み合っていない地域（主に新しく開拓された地域）に立地する学校は、独自の敷地を特定の方法で（違法に）購入・所有している場合が多い。教室を建設する場合には、まず敷地の四隅に建設することで敷地をブロックし、外部者による土地の横領（他人の敷地内に建物を建設することなど）から守るという手法が多くとられていることが明らかになった。一方、密集地域（主に古い地域）においては、土地に余裕がなく、学校は独自の敷地を持たずに賃貸の部屋を教室として借りている事例が多い。

また、まとまった数の部屋を借りたり、大きな敷地を購入することが困難なため、地域内に教室を分散して借りたり、複数の小さな敷地を購入するなどの手法が取られている。この場合、学校と周辺地域との間に明確な境界は存在せず、学校と地域はお互いに関係し合いながら成り立っている。また、これらの多くの学校は独自のトイレや校庭を持たず、地域内のトイレを有料で借り、スラム内の路地や空き地を校庭の代替として利用している場合が多い。その他、ほとんどの学校では給食を提供しておらず、子どもは昼休みになると帰宅し自宅で食事を済ませることになっている。このような学校は地域の資源を利用することではじめて成り立つもので、学校の「場」を地域にまで広げることで自律していると言える。

このように学校の「場」が地域に広がることで、学校と地域の間にはいくつかの現象が生じていることが明らかになった。まず、子どもは学校の敷地内に拘束されないため、休み時間に学校周辺の地域のお店で自由に食べ物やおもちゃを購入しており、店主も子どもの存在によって商売がうまく行っているとのことであった。一方、子どもにとっては地域内で営まれるさまざまな商売・仕事に触れながら休み時間を過ごしており、校庭における子どもだけの遊びとは異なる多様な活動が繰り広げられることとなる。教員の目の行き届かない路地での遊びやトイレまでの道中は一見危険をはらんでいるようではあるが、教員の話によるとこれまでの事件・事故が起こった経験はないという。それは、周辺地域の商売・仕事をしている大人たちの目が常に地域に注がれていることに大きく起因しているようである。トイレでは、管理人が子どもたちが安全に衛生に利用できるよう気を配っており、教員がそこにわざわざ立ち会う必要もない。

これらは、学校の資源が不足していることから生じる現象であり、学校側は将来的には独自の校庭やトイレを持ち、給食を提供できるようになりたいと考えている。しかしながら、特にスラムという貧困地域における上記のような学校と地域の持ちつ持たれつ関係は合理的と言える。特に、資源の少ない小さな学校ほどより貧困世帯の子どもの教育の場となっている状況も見られ、その果たす役割は重要である。Ministry of Housingによれば、今後これら Non formal 学校においても一定の施設整備基準を設け、認定を進めていく計画であるという。果たして学校の「場」を学校の敷地内に自律させる従来の整備基準が賢明なのか、地域と共に自律する学校の「場」の意義について問い直す必要があるのではないだろうか。